

高度コミュニケーション社会と技術

白根禮吉（電気通信科学財団理事長）

近年の日本は高度コミュニケーション社会——経済的、社会的、文化的、知的な面で自主性をもって活発に動いている社会——への道を進んでいる。その基盤となる技術システムには交通メディアと情報通信があるが、交通システムはほとんど新技術が出そろうて、もはや飛躍的な技術革新は望めない。一方、情報通信の分野は、60～70年代にレーザー発振（半導体）、マイクロプロセッサの開発、大規模集積回路の工業生産などの画期的な進展があったが、まだ未開発な分野が多く、80～90年代にかけて、光通信、100万ビット以上の情報容量をもつより小型化したコンピュータの出現等、新しいシステム、メディアが次々と開発され、非常な様変わりを遂げる革新的段階に到達することが予想される。つまり、情報の伝達、蓄積、検索、整理、加工などが非常に安価に、たやすくできる革命的時代に入りつつあり、これが新しい高度コミュニケーション社会の基盤を形成していくであろう。

今後10～20年の間に予測される日本型高度コミュニケーション社会の特質を、情報通信メディアの動向に即していえば、多数価値の共存とタウン化現象である。

多数価値の共存

生産力がふんだんに存在する社会では、個別欲求を充足させる社会的受容量に余力が生じ、生産を中心とした効率化を目指す単一的論理の世界から、各個人が個別の欲求をもつことを可能とする多数価値共存の段階へと進む。これは、個々の人間が自分の考え方に基づいて生きてゆける社会であり、高度コミュニケーション社会を一層深化させるものといえよう。技術サイドから見ても、機能の複合化と分散処理の多用によって、こうした個別欲求に対応できる段階へと成熟しつつあるのが今日の状況である。

タウン化現象

情報のタウン化現象とは、具体的には電子化された情報センターの扱う領域が専門的、業務的なものから生活関連情報全般に拡大していくことである。したがって、情報の重点が仕事や職場から、街とか地域、ホームタウンへ、生産から消費へ、組織から個人へ、体制から草の根へ移動することを意味している。これは、男社会における職場の地盤沈下、家

事労働の効率化による余暇の増大で女性の情報活動は男性より活発化し、男社会から女の時代へ、プロとアマ、あるいは表文化と裏文化の再編成などの新しい傾向をもたらすものとなる。このような社会転換に適應するには、一握りのエリートや支配層の主導によるのではなく、一般市民による高度の大衆参加社会が実現することである。

社会的制御の重要性

高度コミュニケーション社会を重大な危機に陥れることなく発展させ、持続させるにはいくつかの前提条件が必要である。

第1には、不当に圧迫され、疎外された構成員をつくらないことと、逆にチェックや評価のきかないオールマイティ分子をつくらないことがあげられる。第2には、大火災やパニックに対して、考えられるあらゆる安全策を講じておくことが重要である。これには、特にコミュニケーション・システムの役割が大きく、長期的で綿密な施策が求められよう。

先例のない社会の到来

情報化社会と呼ばれる高度コミュニケーション社会は、市民大衆レベルでの情報活動能力を大きく拡大したが、人間離れた能力をもった大量の技術システムとの日常生活空間における共存関係を伴う。例えば、電話は日本に5,500万台（80年）入っているが、今後、画像、コンピュータ通信等と任意に組み合わせられて、電話も情報端末機の一部の機能にすぎなくなり、多様な情報サービスとの組合せ、デジタル化によって情報メディアとの共存関係は日常化するであろう。

こうした社会にいかに対応するか。これには、かつてのアメリカのような手本になるものがない。アメリカではケーブルTVが発達しているが、日本では光通信システムで多くのチャンネルを持たせる形が有力だし、オフィス・オートメーションもアメリカでは秘書の仕事のカバーだが、日本ではこれによってビジネスマンを雑務から解放し、知的仕事に専念させる方向に向かうであろう。

新しい情報通信システムの進展が、日本社会に何をもたらすかを十分に検討しなければならない。

交通の通信による代替可能性

宮川 洋 (東京大学教授)

交通は人の移動と物の移動に分けられ、さらに、それぞれを情報の移動と非情報の移動に分けることができる (Table 1)。人の情報の移動と通信との関係には①代替、②補完、③相乗の3つの関係があるといわれる。

①代替関係：手紙や書類の郵送を電話やファクシミリで行ったり、対面会議の代わりにテレビ会議で済ますといった、いろいろな例がある。

②補完関係：一つの手段が他の手段の助けによって、その目的がより完全に達成されるような関係である。訪問先の相手に訪問前に電話で都合を聞くとか、宿泊や乗り物の席を電話で予約しておくといった行為は、交通が電話によって補完されているのである。

③相乗関係：時間的な継起において、互いに刺激、誘発する関係である。ポートピアの体験を電話で他人に伝え、刺激することで他人の行動を誘発する。

これに対し、物の移動では、手紙、書類、ディスクなどの情報の移動を目的とする場合は容易に電気通信で代替できる。本来的に物自体の移動を必要とする場合は、電気通信の役割りは移動の効率化を実現することにある。AからB地点に品物を送るとき、B地点に代替品があれば、これを利用することによって物自体の移動の効率化を達成できる。

この中で非常に複雑なのは代替である。例えば、里帰りを電話で済ますという場合も、里帰りと電話による会話は厳密に言えば全く違う。そこで、われわれの研究では、おおよその主目的がおおよそ達成できれば代替できたとしている。テレ・ショッピングも、主目的が物を買うことであれば代替できるが、買物でストレス解消を図っているなら電話で代替で

きない。こうした関係について、少しずつ調査を進めているが、代替できる部分はかなりあるようだ。ただし、その場合には次のような問題点がある。

①コスト、②情報量、③機能の分析、④アセスメント、⑤社会病理現象、である。

こうした問題点を認識した上で、交通に多くを依存する社会がいいのか、それとも通信に多くを依存する社会がいいのかは、われわれの選択にかかっている。私自身の考えは、いまの社会は交通を浪費しすぎているので、無駄な交通は可能ならば通信で代替した方がいいと考える。

そこで、交通の通信による代替の将来展望を大胆に示すと Table 2 のようになる。この中で最も話題になるのは在宅勤務であろう。在宅勤務の必要性については住宅難、通勤難の解消であろうが、これには事業所の都市中心部から周辺部への分散も併せて検討する必要がある。また、都市のサラリーマンの場合、職場の仕事は定型化したものでないことが多い。職場は生涯教育の場であり、広い意味では人間形成の場にもなっている。このような、人と人とのコミュニケーションで本質的な“出会い”を演出する一体的な場を形成するには、現在の技術では極度に情報量が不足しているが、現状の技術でも S F 的な在宅勤務を除けば、人の移動を代替、補完し、物流の効率化に貢献できる余地も多く残されている。

Table 1

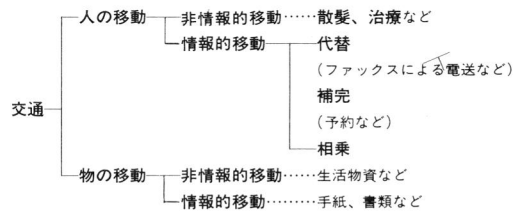
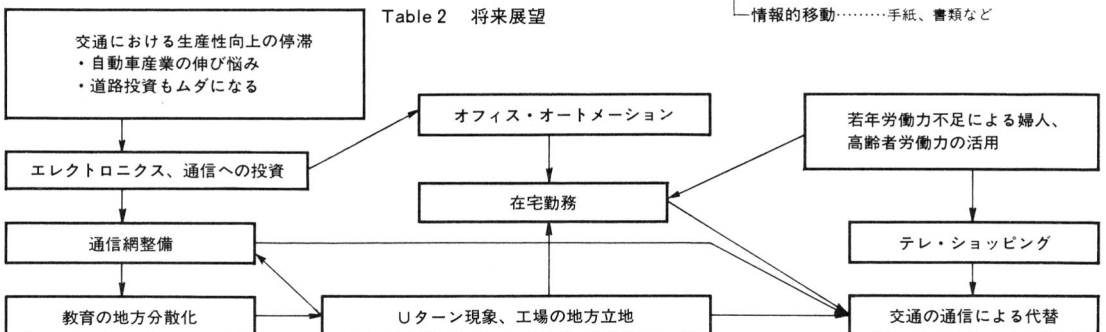


Table 2 将来展望



パーソナル・コミュニケーションとは何か

岸田 秀（和光大学教授）

パーソナル・コミュニケーションとパーソナルでないコミュニケーションとを考えると、前者がより基本的なコミュニケーションである。動物では、ハチのダンスにせよ、鳥の鳴き声にせよ、個体から個体、個体から集団、集団から集団への直接的な、パーソナルなコミュニケーションである。つまり、パーソナルではないコミュニケーションは文化の産物である。他の動物が文化を作らず、人類だけが文化を作ったのは、人類が2本足で歩いて手が自由になったとか、知能が優れているからではなくて、人類の本能が壊れたためである。本能に基づくパーソナル・コミュニケーションの欠落を補うために、人類は言語という、抽象的な概念によるコミュニケーションの手段を生み出し、さらに、自然環境に適応し、調和を図る行動形式としての本能の欠落は自然と人間との間にズレを生じさせ、そのズレを埋めるために、人間は環境を変えることによって文化を作った。したがって、文化とは本質的に病理現象である。

しかし、文化によってこのズレは決して埋まらず、ますます広がり、それを埋めるために別の新しい文化を作っていくという悪循環に陥った。その最もひどい例が近代西欧文明である。しかし、文明を捨てて原始社会に戻ることも、もはや本能の壊れた人間にはできないから、われわれはこの悪循環から抜け出せない。

未開社会とは、とにかくこの悪循環をくい止めることに成功した社会である。未開社会とはいえ、すでに言語をもち、その小人数の狭い部落共同体の中でも、人間は他の動物が見出したような安定感もてない。その不足を、共同体の外に神とか祖霊とか他界といったものを設定することによって、抽象的に補っていた。他の共同体との交通もその延長にある。自然と調和している動物は他の集団とコミュニケーションする必要はないが、人間は自分の共同体で充足できないものを他の共同体に求めた。交換も最初は互いに不足している物資を補うために始まったのではなく、まず交換という抽象レベルでの必要性があって、その手段として適当な物が選ばれたのである。

例えば、ブタと魚の交換でも、ブタを見たことも食べたこともない人がブタを食べたいという現実的

欲望をもつわけがない。つまり、自分の共同体では充足できないものを、他の共同体に抽象的レベルで求めるシンボルとしてブタが持ち出されたのである。しかし、交換によっても、その欠落は決して補えない。未開社会とは、そこで補えないなりに我慢して、自分の共同体内に閉じ込め、不満をもちながらもそれなりにやっていくことに成功した社会である。

ヨーロッパに発生した近代社会とは、補えないものを求めて、他の共同体との関係を世界中に広げていった社会といえる。それによって、近代社会では、個人が主たる集団に所属することで保っていたアイデンティティー（統一性）がバラバラになってしまったのである。近代に登場した個人主義とは、崩壊した個人の統一性をつなぎとめようとする試みで、その幻想として「個人」の概念が必要となると同時に、「世界」という概念も必要になってきた。世界全体を統一的イメージとして把握し、その中に存在する個人として、自分自身の統一的イメージをもつことが近代西欧文明では必要になってきたのである。しかし、その試みは本質的に不可能で、挫折せざるを得ない。

そこであがいているのが現代人である。自己の存在の統一性は崩壊していながら、世界の統一的イメージを求めているために、世界のあらゆることを知り、体験し、その中に自分が存在していなければならない。したがって、情報化社会といいながら、現実に生存するために必要な情報は少ないのに対し、芸能とか趣味的な情報は氾濫している。そこでは、タレントや有名人の行為を知ることを通して、実際には自分が実現できない可能性を代理的に充足させている。それは、自己の全体像の回復という不可能な試みである。現代文明の進歩は決して真の満足をもたらさない。しかし、十全な意味での可能性は失われたとはいえ、いくらかでも残されている可能性は、パーソナルなコミュニケーションでしか得られないであろう。したがって、エレクトロニクスや通信がいくら発達しても、それは抽象化のレベルが高まるだけで、人間にはどうってことはないというのが、私の結論である。

人間と余暇

渡部昇一（上智大学教授）

余暇を示す言葉はレジャーなどいろいろあるが、いずれも「許された」ということと関係している。それに対立する労働のレイバーの語源は、奴隷が肩からひもでクワなどをひくと首はうなだれ、手はブラブラしてくる状態を示す「ラブ」という言葉である。奴隷のスレイブもラブが語源だし、ゲルマン人が奴隷用に集めた人々をスラブと呼んだのがスラブ人の語源となった。プラトンは、神は腰をかがめ、手をブラブラさせて労働している者を哀れみ、仕事を休んで背を伸ばし、再び立ち上がれるようにする祭日を、年に何回か制定した、といている。日曜日の起源も、神は罪として労働を与え、それを免れる日としてあった。

このようにヨーロッパでは、労働は悪いもの、苦役で、余暇は許されたいものであるという見方が、古代ギリシア時代から続いていた。この労働観に対して、8世紀頃、カトリックの修道僧ベネディクトが「祈れ、そして働け」という原理を提唱した。この時代に、キリスト教はゲルマニア、ブリタニア、ガリアなどのヨーロッパ内部に広まったが、その根底にはこうした新しい労働革命があった。

その後に出てきたプロテスタントの労働観は「勤勉」であるが、なぜよく働くのかははっきりしない。私は次のように考えている。カルヴィン神学では、地獄へ行く人間は最初から決まっているという。だから、人は常に不安をもち、それを解消したいと願っている。それには、この世で落後すればあの世でも落後して地獄へ行くことになるから、この世で立派な生活をするために、一生懸命に働くことが救いとなる。カトリックでは聖フランシスコのように乞食でも聖人になれるが、プロテスタントでは決してそうはならない。プロテスタントによって、欧米にも猛烈な労働観が出てきた。

マルクス主義では労働を悪と見て、そうしたいやらしいものは万人が分担すべきで、労働をしない有閑階級を弾劾した。ハムトンは階級の差はレジャーの差であるとしたが、『有閑階級の理論』を書いたヴェブレンも同じようにレジャーの差として捉え、有閑階級をなくし、暇を誇示することから生産を誇示する方向へ進むことを主張した。その分析は非常に鋭く、その結論は当時としては正しかったかもし

れないが、現在では妥当しない。現代の先進諸国は過剰生産に悩み、その課題は、作り過ぎを適切に調節し、人間が不幸感なくして生きていけることである。生産を尊いとするヴェブレンの考えは、困るのである。したがって、いまや余暇は従来とは全く違った視点で見る必要がある。現在の余暇の形を観察すると、次の3つに分けられる。

①リリース：ホッと一息つくことで、仕事帰りに一杯飲んで気分をほぐすといった例である。最近では余暇時間も収入もふえてリリースがあり過ぎるため、リリースからリリースすることにエネルギーを使ったりしている。

②レクリエーション：産業の発展によって分業が進み、同じ労働をくり返すために身体の状態が不自然になってくるから、それを人間本来のものに戻すことを意味している。イギリスで提唱され、労働者が工場から田園や山野の自然の中へ出かけ、スポーツをすることが盛んになった。イギリスでは、こうしたレジャーはほとんどタダに近いが、日本では民間が有料で提供している。しかし、これによってイギリスは昔より決してよくなっていない。レジャーが単に労働からの解放としてあるときは人間は高まっている。労働など全くせず、レジャーのためのレジャーに明け暮れたイギリス貴族のような人々が、議院内閣制、労働法、保険、自然保護といった創造的な仕事を生み出しているのである。

③真のレジャー：レジャーを労働から離して考えたときに人間は向上し、創造的になる。例えば、日本の茶道は単なる形式を超えた、人間性の向上につながっている面がある。華道、和歌俳句、剣道といったものにもそれが見られる。このあたりに、真のレジャーの方向性があるようだ。

日本人と欧米人の労働・余暇観を比べると、宗教的バックボーンの違いがあるようだ。天皇が田植へのマネをしないと治まらない日本に対して、ヨーロッパの王様はそんなポーズは必要ない。お盆には鎮守の森へ帰郷し、余暇と労働のけじめのない日本人は、多神教的な本能をいまだに保存している唯一の先進工業国人なのである。